

ジュディス・シュクラーと冷戦リベラリズム⁽¹⁾

小田川 大 典

【目次】

1. 「冷戦リベラリズム」の認識論的前提？
 2. シュクラー「恐怖のリベラリズム」再訪
 3. 「残酷さを第一に考える」解説
 4. 「知識の政治学」の政治的含意
- 文献一覧

1. 「冷戦リベラリズム」の認識論的前提？

従来の政治思想史研究において「冷戦リベラリズム」(Cold War Liberalism)は、ひどくネガティブな印象を与える言葉であった。1937年に生まれ、冷戦期に活躍した思想史家アンソニー・アーブラスターは⁽²⁾、リベラリズム史の古典『西洋リベラリズムの興亡』(1984)で次のように述べている。

1945年によりやくファシズムが敗北すると、以後「全体主義」は、ほぼ共産主義の同義語とみなされるようになる。1945年以後にある種の復活を遂げたりベラリズムは、反共産主義という支配的な特徴を帯びることとなったため、この思潮が「冷戦リベラリズム」と呼ばれるようになったのはもっともなことであった。「冷戦リベラリズム」の特徴は、その圧倒的な支配力である。共産主義は（自らの使命としては）社会主義を唱えてはいたが、（現実には）権威主義であったため、リベラルたちは——ケインズのように共産主義の力と歴史的な意義を認める少数の例外もいたが——共産主義には対抗せざるをえなかったし、実際、つねに対抗してきた。しかし冷戦期には、この共産主義への対抗という姿勢だけがリベラリズムのトータルな特徴となってしまったために、結果としてリベラリズムのより根本的な原理が犠牲にされたり、見失われたりすることになった。すなわち、言論と意見表明の自由、寛容、多様性といっ

八
八

(1) 本稿は、2024年11月10日に東北大学川内キャンパスで開催された社会思想史学会の「政治理論とインテレクチュアル・ヒストリー」セッションでの報告をもとにしている。当日有益なコメントを下された方々には感謝を申し上げます。

(2) アーブラスター (Anthony Arblaster, 1937-2022) については、スティーヴン・ルークス (Lukes 2022) とアンドリュー・ギャンブルら (Gamble et al. 2022) の追悼文が詳しい。

たりベラリズムの原理が、突然、共産主義者や——当時のご都合主義的な表現を用いるならば——「共産主義シンパ」には適用する必要のないものとみなされたのである。同様に、たまたま反共産主義だったという理由で、非リベラルで抑圧的な政治体制を黙認することが可能になったし、さらにひどいことには、反共産主義であるという理由にもとづいて、非リベラルで抑圧的な体制をまことしやかに正当化することもできるようになった。こう言ってもいいだろう。冷戦リベラリズムは「本当の」リベラリズムでは断じてなく、むしろリベラリズムに対する裏切りであった。しかも、その裏切りを実行し、是認していたのは、皮肉なことに、ロック、モンテスキュー、トクヴィル、ミルの伝統を継承し、引き合いに出していた、自称「リベラル」だったのである (Arblaster 1984: 309-310)。

だが近年、リベラリズム史研究と冷戦研究の成果を踏まえ、冷戦リベラリズムの思想史的な位置づけについて注目すべき研究が次々と現れている⁽³⁾。たとえば、ヤン＝ヴェルナー・ミュラーは、ピーター・ラズレットらのいう「政治哲学の死」の時代 (Laslett 1956, Laslett & Fishkin 1979) が冷戦期に対応していることを踏まえつつ⁽⁴⁾、この時代に活躍した三人の思想家であるアイザイア・バーリン、カール・ポパー、レイモン・アロンの「冷戦リベラリズム」の中核に、ジュデイス・シュクラールのいう「恐怖のリベラリズム」——残酷さ (Cruelty) の回避を最優先するリベラリズム——という政治的感受性 (political sensibility) と、それを支えるある種の認識論的前提としての「知識の政治学」 (politics of knowledge) ——「政治的知識の基盤と限界に関する問い」 (the question about the bases and limits of political knowledge) についての考察——が存在していたと指摘している (Müller 2008)。

ミュラーの整理によれば、二つの世界大戦は、三十年戦争がそうであったように、社会認識と道徳の両者について「不確実性の時代」をもたらすことになり、その中で、一方では社会認識において確実性を求める潮流 (マルクス主義や実証主義) が、他方には近代以前の古典的哲学や自然法に道徳的な確実性を求める潮流 (レオ・シュトラウスやエリック・フェーゲリン) が現れる。

だがバーリン、ポパー、アロンら冷戦リベラルは、この両者から距離を置き、不確実性の時代に即した非原理的で非理論的な知のありようを、カントの『論理学』講義の三つの問いに応答するかたちで提示している。ミュラーの整理は以下のようなものである。

八
七

- (1) 「わたしはなにを知りうるか？」 (Was kann ich wissen?)。社会認識においても道徳認識においても、われわれは確実に不確実性に直面せざるをえない (「不確実性という確実性」)。

(3) 冷戦リベラリズム研究の全体像については Bessner, Brenes & Franczak 2024 を参照。

(4) ラズレットらのいう政治哲学の死と再生については Koikkalainen 2005 を参照。

(2)「わたしはなにをなすべきか?」(Was soll ich tun?)。マックス・ウェーバーのいう近代社会における「神々の闘争」は、価値の多元化を引き起こす。われわれはこの多元性に耐えなければならない(価値の多元化への耐性)。

(3)「わたしはなにを恐れなければならないか?」(Was muss ich fürchten? —「わたしはなにを望まなければならないか Was darf ich hoffen?」を改変)。不確実性に耐えられぬ者たちの中から、独善的な偽りの預言者(理論家)が現れるかもしれないし、不確実性への不安は、人びとをそうした偽りの預言(理論)への熱狂へと導くかもしれない。われわれはそうした不安に狼狽えることなく、過去の残虐行為についての経験の記憶を踏まえつつ、偽りの預言(理論)への熱狂に抗し、マックス・ウェーバーのいう「責任倫理」に徹しなければならない(不安に起因する熱狂への警戒)。(Müller 2008: 48f)

このように、冷戦リベラリズムに、たんなる亡命体験者としての経験や、同時代への不安だけでなく、いまなお学ぶべきポジティブななにかを探ろうとするミュラーは(Müller 2018)⁽⁵⁾、この三人の思想家に、「恐怖のリベラリズム」という政治的感受性と、その認識論的前提としての「知識の政治学」を見出している。

だが問題はこの二つの関係である。将来への希望ではなく、政治権力による残虐行為についての記憶に導かれ、残酷さの回避を最優先に考えるシュクラの「恐怖のリベラリズム」に近い発想は、たしかに冷戦リベラリズムにも看取される。しかし、シュクラの「恐怖のリベラリズム」に、「知識の政治学」のような認識論的前提はあったのだろうか。

以下では、この問題を、シュクラのモンテーニュについての著作をもとに検討する。手順としては、まず次節で彼女の「恐怖のリベラリズム」論文(Shklar 1988)を再訪し、第3節ではシュクラの主著とされることの多い『ありふれた、いくつかの悪について』(Shklar 1984)⁽⁶⁾の元となったモンテーニュ論「残酷さを第一に考える」(Shklar 1982)を検討する。そして最後に再びミュラー論文に立ち戻り、シュクラがモンテーニュを手がかりにたどり着いた「知識の政治学」の政治的含意を考えたい。

(5) 思想としての冷戦リベラリズムになんを見出すかについて、議論は分かれている。ミュラーは「政治的感受性」(Müller 2008, ミュラー 2024)や「対立を自分の言葉で定義する想像力」(Müller 2018)を、チュルニスは「緩和されたリベラリズム」(Cherniss 2021)を見出そうと試みているが、モインは冷戦リベラリズムがリベラリズムの崩壊をもたらしたと述べている(Moyn 2024)。チュルニスとモインについては、Hartman 2024, Hiruta 2024, Marriott & Moyn 2024, Charrayre 2024を参照。

(6) これまで慣例的に『日常の悪徳』と訳されてきた *Ordinary Vices* であるが、シュクラが、ごくありふれた複数の悪について、その優先順位を問題にしていることを踏まえ、このように訳すことにした。なお、難解をさわめる同書の解説の試みとして、Sabl 2019 と大川 2022を参照。

2. シュクラール「恐怖のリベラリズム」再訪

シュクラールの「恐怖のリベラリズム」論文が収録された『リベラリズムと道徳的生活』の序文において、編者のナンシー・ローゼンブルムは、1988年の大統領選挙の結果（ジョージ・H・W・ブッシュ候補の勝利）を踏まえて多くのひとびとが提起した「リベラルはなぜ嫌われるか」問題——この問いの起源はわれわれが考えているよりもずっと古い——に言及し、「政策の道徳的影響に対する無関心」を特徴とする従来のリベラリズムが、いまや「品性や道徳教育に対する関心の欠如、親の権威の喪失、共有されているすべての伝統的価値の浸食を意味する否定的なレッテル」となっていることを指摘している（Rosenblum 1988）。ローゼンブルムの意図は、そうした誤解をとき、政治理論としてのリベラリズムの実像と可能性を示すことにあった。ゆえに、収録されたシュクラールの論文も、リベラリズムの政治理論としての側面に力点を置いて、書かれたものとして読む必要がある。

実際、シュクラールは同論文の冒頭で次のように述べている。

リベラリズムは、政治的な教義を指すのであって、さまざまな形態の啓示宗教や他の包括的な世界観によって伝統的に提供されてきた生の哲学を指すのではない。リベラリズムはたったひとつの最重要なねらいをもつ。すなわち、ひととしての自由（personal freedom）を発揮するために必要不可欠な政治的条件を確保することである（Shklar 1988 : 21）。

そしてリベラリズムは「他人の自由への干渉の禁止を別にすれば、ひとがどのように生を送るべきか、あるいはどのような個人的選択をなさなくてはならないかについて積極的に述べる教義を一切もっていない」（Shklar 1988 : 21）。

このようなリベラリズムの歴史的起源を、シュクラールは宗教戦争の中で形成された「寛容」に求めている。

宗教戦争がもたらした残虐行為は、数多くのキリスト教徒たちを、教会がおこなう公共政策から離れさせ、寛容をキリスト教の慈愛の表現とみなす道徳へと振り向かせる効果をもった。たとえば、カルヴァン派のなかでのセバスチャン・カスティリオンを考えてみればよい。また、葛藤するさまざまな精神的衝動に引き裂かれて、残酷さと狂信を人間について徳の最たるものと定める懐疑論者もいた。そのなかでももっとも有名なのがモンテーニュである。どちらの場合であっても、個人は（神聖なる良心の担い手であるか、残酷さの潜在的な犠牲者であるかを問わず）公的な抑圧による併呑から保護されるべきである、とされている（Shklar 1988 : 23）。

カスティリオンは信仰を動機として、モンテーニュは信仰の喪失と懐疑を動機として、寛容の思想に辿り着いた。ここで注意しなければならないのは、寛容はリベラリズムの起

源ではあっても、政治理論としてのリベラリズムとは異なるという点である。「身の毛もよだつ恐怖のなかから生まれてきた確信、残酷さこそ絶対悪、神や人類への攻撃であるという確信」に基づく寛容は、リベラリズムの「歴史的発展の核」ではあっても、「(憲法によって) 制限される責任政府という制度へのコミットメントがなければ、リベラリズムとしては不完全である。モンテニユはたしかに寛容な人道主義者であったが、けっしてリベラルではない。この点において、モンテニユとロックとの懸隔は大きい」(Shklar 1988: 23)。

「公的抑圧による併呑から個人を保護すること」を意味する「寛容」のための「(憲法によって) 制限される責任政府という制度へのコミットメント」としてのリベラリズム。ただし「制度へのコミットメント」の動機はさまざまでありうる。シュクラーは、政治理論としてのリベラリズムには、「公的抑圧」の側に注目するか、「個人」の側に注目するかによって二つの党派が存在すると述べ、エマーソンに依拠しつつ、「公的抑圧」がもたらす残酷さを回避することに努める立場を「記憶の党派」(a party of memory)、「個人」にとっての善の実現に努める立場を「希望の党派」(a party of hope)と呼んでいる(Shklar 1988: 26)。

ここでいう「希望の党派」とは、保護されるべき「個人」の側に注目し、その権利や自己発展といった「共通善」の実現を望むがゆえに、リベラルな制度構想にコミットする立場を指す。シュクラーが念頭に置いているのは、ジョン・ロックとジョン・ステュアート・ミルである(Shklar 1988: 27)。

これに対し「記憶の党派」は、「公的抑圧」がもたらした過去の「残酷さ」——「より強い者・集団が自らの有形無形の目的を達成するために、より弱い者・集団にたいして意図的に加える物理的な苦痛、第二次的には感情的な苦痛」——の「記憶」をもとに、「共通悪」としての「残酷さ」の回避を最優先するためにリベラルな制度構想にコミットする立場を指す。「記憶の党派」は、その制度構想においては、「より大きな残酷さ」を取り除くための手段として「最小限の恐怖」を伴う法の執行を——恣意・専断が加わらないようコントロールすることを義務づけた上で——許容する(Shklar 1988: 29)。

このように「寛容」を制度として実質化するために、「寛容」が求めていた「残酷さを第一に考える」という原則を緩和し、「共通悪」を取り除くための手段として「最小限の恐怖」を伴う手段に訴えるリベラリズム——それは政治体制としては「憲法によって制約されたデモクラシー」(立憲デモクラシー)に対応する——を、シュクラーは「恐怖のリベラリズム」と呼び、これが自分自身の政治的立場だと述べている(Shklar 1988: 23)⁽⁷⁾。

以上が「恐怖のリベラリズム」論文の概要であるが、ミュラーが「知識の政治」と呼んだ認識論的前提との関係はどうだろうか。シュクラーは「恐怖のリベラリズム」と「心理

(7) シュクラーが「恐怖のリベラリズム」という概念を最初に用いたのは、おそらく『ありふれた、いくつかの悪について』(1984)である。この概念は『モンテスキュー』(1987)でも用いられており、「恐怖のリベラリズム」論文(1988)はなんども練り直された最終決定版ということになるだろう。実際、論文の最後には「批判に依て」とでも呼ぶべき記述が添えられている。

学的」に相性のよい認識論的前提として懐疑主義を挙げている。蓋し、懐疑主義は、多元化した価値が競合した場合、そのどれかを確信をもって選ぶことができないため、競合する価値の対立が激化する前に、それを緩和しようと努めるだろうという点で「寛容」を唱えることが期待できるからである。

だが、あらゆる懐疑主義が寛容を導くわけではない。シュクラールは、ニーチェのような激しい懐疑主義の哲学者はむしろ抑圧的な支配を認めかねないとも指摘している。ならばシュクラールは、どのような懐疑主義が寛容をもたらし、「恐怖のリベラリズム」の認識論的前提になると考えていたのだろうか。この問いへの答えを探るには、政治学に力点を置いた「恐怖のリベラリズム」ではなく、シュクラールが典型的な寛容の思想家と考えたモンテーニュについてのエッセイを精査する必要がある⁽⁸⁾。

3. 「残酷さを第一に考える」解読

シュクラールは『ありふれた、いくつかの悪について』(1984)のもとになった論文「残酷さを第一に考える」(Shklar 1982)とスタロバンスキー『モンテーニュは動く』の書評(Shklar 1987b)において、モンテーニュの懐疑主義を論じている。

シュクラールによれば、モンテーニュはセクストゥス・エンピリコスの存在を初めて知った世代に属しており、その著作を通じてピュロンの懐疑主義に強く魅せられていた。モンテーニュは、ピュロンの懐疑主義は、(1)〈外見＝現れ〉と〈内面＝存在〉の断絶(前者を通じて後者を認識することは不可能)を認めつつ、それでも(2)不確かな〈外見＝現れ〉を頼りに他者とともに生きていく以外に選択肢はない問い考え方だと解している(Shklar 1987: 653)。〈内面＝存在〉についての認識への懐疑は、〈外見＝現れ〉をあてにするしか

(8) 1970年代の後半にモンテーニュを読みはじめたことについて、シュクラールは次のように回想している。「アメリカ史を研究したことで、われわれのあらゆる過去と現在の特徴である抑圧と暴力に対するわたしの認識が後退することはありませんでした。そして、そうした抑圧と暴力を隠蔽し正当化するためにつくりだされた幻想、神話、イデオロギーについて考えるにつれ、わたしの懐疑主義は研ぎ澄まされていきました。こうしたことを考えているうちに、わたしがモンテーニュの『エッセー』を手にとったのはごく自然のことでした。彼はわたしにとって急速に真のエッセイストの模範であるように思われてきました。すなわち、彼は、読者の頭を小突くのではなく、主題の内と外を行き来する実験的な文体の達人であったのです。モンテーニュを読むうちに、わたしは、彼が美德を説いたのではなく、さまざまな悪、特に残酷さと裏切りについて考察していることを理解するようになりました。わたしは「残酷さを第一に考える」政治理論とはどのようなものだろうかと自問してみました。わたしは、故意に苦痛を与えることは無条件に悪であるということを出発点として、そこからリベラルな政治理論を展開しようと試みたのです。その探求は、他の多くの悪、特に裏切りについて、それらがもつ残酷さを激しくする傾向についての考察へとわたしを導きました。わたしがこうした考察に基づいて執筆した『ありふれた、いくつかの悪について』という本は、かなり暫定的なもので、なんらかの声明ではなく探求であり、読者に結論を提示する試みではなく、読者を悩ませる試みです。」(Shklar 1996: 277, cf. Hess 2014: 99ff)。シュクラールとモンテーニュについては Yack 2020, Hess 2014: 99ff を参照。政治思想家としてのモンテーニュについては、宇羽野 2014 の第4章を参照。

ないという諦念をモンテーニュにもたらした。だが、スタロバンスキーが『透明と障害』で詳細に論じたように、「透明」な〈内面＝存在〉の認識への渴望ゆえに、ルソーは「障害」となる偽りの〈外見＝現れ〉を憎悪する。

『学問芸術論』以降のルソーを苦しめ続けることになる(1)「危険なピュロン主義」は、モンテーニュをどう導いたのか。シュクラールは次のように述べている。

懐疑論者はどのように自分の人生を過ごすのか？間違いなく、それはいまなお盛んに議論されている問題である。モンテーニュは、ちょうどセクストス・エンペリコスを発見した世代に属しており、彼から強い影響を受けていた。この古代の懐疑論者は、競合するストア派やエピクロス派と同じく、哲学の究極の目的は精神的な平穏であり、それを達成できるのは懐疑論だけだと考えていた。等しく正しいが互いに矛盾する複数の道徳や真理の主張に直面した場合、懐疑主義者なら、シンプルに判断を保留し、リラックスする。

どんな場合でも、彼は、そのときどきに彼に見える通りに行動し、常に考えを変えられることができることを受け入れる。自分の外見を生み出している本当の「わたし」を見つけるために自分の内面を掘り下げることが重要だが、そのような探究に深刻さが伴うことはない。必要なのは、確信を持たずに生きていく能力だけだ。宇宙を支え、真理への信念を保証する神への信仰を教えられた人々にとっては、それはより困難なことだったかもしれない。モンテーニュは、古代の懐疑論者の心の平穏を追い求めるためにあらゆる努力をした。だからこそ、(起こりうる自分の死や苦痛や不幸に対する想像力が欠落しているがゆえに暴風雨の海にある船の上にいてもただ風の様子をみているだけの)ピュロンの豚に感銘を受けたのだ(Shklar 1987b : 654-655)。

シュクラールによれば、不確かな〈外見＝現れ〉を頼りに他者とともに生きていくことを選んだピュロン主義者は、道徳について考える際に、抽象的な原理や理論ではなく、感覚にもっとも強く訴えかけてくる残酷さを手掛かりにするであろう。

「残酷さを第一に考える」でシュクラールは、残酷さを第一に回避すべきものとするモンテーニュの道徳を、キリスト教の道徳と比較するところから議論を始めている。シュクラールによれば、残酷さは、ありふれた悪のひとつであり、キリスト教道徳と残酷さの回避は矛盾しない。だが、キリスト教道徳は、七つの大罪を断罪するための手段として残虐行為を用いることを厭わない。七つの大罪への対処を最優先するキリスト教道徳が、残虐行為を抑制するどころか、激しく助長しかねないということをモンテーニュとその弟子であるモンテスキューは、新大陸におけるスペイン人の蛮行を通じて直視せざるをえなかった。そして、複数の悪が存在するとき、優先順位を間違えれば、結果的に残虐行為がなされ、さらにいえば「野蛮」の克服という名目によって、それが助長される場合もある。新大陸でのキリスト教徒の蛮行を観察することでモンテーニュ＝モンテスキューが得たのは、ありふれた、複数の悪が存在するとき、最優先で回避すべきは残虐行為であるという洞察と、

「野蛮」を、「未開」ではなく、たんに自分の習慣にないことと捉える多文化主義的な視点であった (Shklar 1982 : 16-18, 19-20)。

次にシュクラールは、キリスト教道徳に縛られることなく、政治の手段として残虐行為を正当化するマキアヴェリイの道徳に対するモンテーニュの批判を検討している。すなわち、運命を「打ちのめし、突きとばす」ことで征服すべき女神だと考えるマキアヴェリイは、『君主論』第25章において、新君主は統治において残酷さと憐れみぶかしのどちらを選ぶべきかという問いについて、残酷さの方が合理的だと確信をもって述べているが、モンテーニュはこの問題を『エッセー』第一章で逆転させ、君主に支配されている人びとにとって、ひたすら憐れみを乞うのと、王の残虐行為に毅然と立ち向かうのではどちらが適切かと問い、どっちでもありうるという「不確実の確実性」を答えとしている。運命をどうにもならないものとするモンテーニュにとって、社会認識とはつねに不確実なものであり、不確実な社会認識にもとづいて残虐行為を手段として肯定することは不可能であった (Shklar 1982 : 18-19)。

だがしかし、残酷さを手段として用いることをいっさい認めないとなると、政治や法の権力を用いて残酷さを回避することも難しくなる。弟子のモンテスキューは「より大きな残酷さ」を取り除くための手段として刑法と刑罰という制御された「最小限の恐怖」を伴う法の執行を是認していたが、モンテーニュにはそれができなかった。「残酷さを第一に考える」モンテーニュは、「寛容」を説くことはできても、モンテスキューのように「恐怖のリベラリズム」を唱えることはできなかったのである (Shklar 1982 : 24-26)。

しかし、シュクラールによれば、だからといって公人としてのモンテーニュが政治へのコミットメントを断念することはなかった。実際、宗教戦争の最中、王権を支持するカトリック教徒としていわゆるポリティーク派と通じ、ボルドー市長を二期務めた。彼はいつでも、個人としての自分と市長としての自分を区別していた。公職者の二枚舌をだれよりもよく知りながら、その虚栄心を潔癖なまでに軽蔑してはいたが、同時に誰もそうした悪と無縁ではないこともわかっていた。

長年の宗教的抗争の後、モンテーニュの心は内戦の縮図のような状態になり、世界の絶え間ない混乱を映し出していた。しかし、そうした政治的認識の混乱は、知的な失敗ではなく、彼が政治的静寂主義やマキアヴェリイ的政治主義の上にあぐらをかくことを拒否したことを反映している (Shklar 1982 : 63)。

八一

とはいえ、「残酷さを第一に考える」がゆえに「恐怖のリベラリズム」を認めることができなかったモンテーニュは現実政治にどう対峙すればよかったのか。「残酷さを第一に考える」において、その答えが示されることはなく、この不明瞭さは、『ありふれた、いくつかの悪について』にそのまま引き継がれることになる。

4. 「知識の政治学」の政治的含意

以上、手短ではあったが、シュクラの「恐怖のリベラリズム」の認識論的前提として、彼女のモンテーニュの懐疑主義の内実を検討した。それはミュラーがバーリン、ポパー、アロンの冷戦リベラリズムの認識論的前提として提示した「知識の政治学」とほぼ同じものであったといえよう。モンテーニュの影響下にあるシュクラの思想には、「不確実という確実性」の視点があり、価値の多元化への応答があり、残酷さの横溢への危機感があった。バーリン、ポパー、アロンの「恐怖のリベラリズム」という政治的感受性と、その認識論的基礎としての「知識の政治学」は、シュクラにも共有されていたのである。

だが、多くのひとは問うであろう。ミュラーが「政治哲学の死」の時代の冷戦リベラリズムに見出した「知識の政治学」に支えられた「恐怖のリベラリズム」という政治的感受性とは具体的には政治とどう関わってくるのか。

二つの大戦によってもたらされた「不確実性の時代」に「政治哲学の死」を前提として政治思想を紡ぐことは困難なことであった。だが、ミュラーはそのような時代にあっても、冷戦リベラルたちが次の二つの試みを続けてきたと述べている。

ひとつめは、彼らが、リベラリズムの理論についての体系的な著作を諦めつつも、この不確実性の時代のさまざまな悪がどのように発生してきたかという問題の答えを、インテレクチュアル・ヒストリー研究を通じて探ったことである。彼らにとってインテレクチュアル・ヒストリーは、現代の諸問題を考えるための非原理的で非理論的な探究だった (Müller 2008 : 57f)。

もうひとつは、思想史研究を通じて得られた道徳についての心理学的知見やヨーロッパ文明についての教養を、エリート公務員に授けたことである。

結局のところ、バーリン、アロン、ポパーが信頼を託したのは (ウェーバーのいう) 責任倫理を身につけたエリート有識者だった。彼らの哲学は、最終的には、それぞれの国の高級官僚のための哲学であった。アロンは、もし自分が有力な政治家や官僚の立場に置かれたらどうするかという質問に答えることを政治的な真剣さの試金石とした。そしてバーリンは、いうまでもなく、彼自身が、大西洋を横断して西側の政治の舵取りをする教養あるエリート層にとっての黒幕として辣腕を振るっていた。こうしてみると、やはり優れた官僚には、うんざりするほどの価値の対立と、複雑さと偶然性の時代としての近代という時代に対峙し、それを理解するために、教養と、道徳心理学についての基礎知識が不可欠である。もう少し手短に言えば、公務員は小説を読むべきであり、自分たちが引き継いだ伝統のことを知るべきなのである (Müller 2008 : 54)。

「不確実性の時代」に「政治哲学の死」を前提として行なわれた冷戦リベラルたちの非原理的で非理論的な思考においては、どうしても「感受性」「道徳心理学」「想像力」「思

慮」「エートス」「教養」のようなものが強調されざるをえなかったといえよう。ミュラーは『ニューヨーク・レビュー・オブ・ブックス』に寄稿した「冷戦リベラリズムから学ぶこと」(Müller 2018)において、それでも冷戦リベラリズムから学ぶことはあるし、思考を諦めてポピュリズムの無思考に媚びてはならないと述べている。「恐怖のリベラリズム」と「知識の政治学」で構成される冷戦リベラリズムからなにを学ぶのか、ミュラーがさまざまなかたちで繰り返す説明は、規範理論のように明晰判明ではないが、引き続き注視する必要がある。

文献一覧

- Arblaster, Anthony, *The Rise and Decline of Western Liberalism*, Basil Blackwell, 1984.
- Daniel Bessner, Michael Brenes & Michael Franczak, "A Brief History of Cold War Liberalism," *Cold War History*, vol. 24, no.2, pp.299-308. <https://doi.org/10.1080/14682745.2024.2310155>
- Charrayre, Thomas, "La guerre froide des libéraux (À propos de : Samuel Moyn, *Liberalism Against Itself: Cold War Intellectuals and the Making of Our Times*, Yale University Press, 2024)," *La Vie des idées*, 27 novembre 2024. <https://laviedesidees.fr/La-guerre-froide-des-liberaux>
- Cherniss, Joshua L, *Liberalism in Dark Times: The Liberal Ethos in the Twentieth Century*, Princeton, Princeton University Press, 2021,
- Gamble, Andrew et al, "Tribute to Anthony Arblaster: Anthony Arblaster sadly passed away on 15 April 2022 at the age of 84," 5 May 2022, <https://www.sheffield.ac.uk/politics/news/tribute-anthony-arblaster>
- Hartman, Andrew, "Liberalism during Its Respectable Era," *Modern Intellectual History*, First View, pp.1-7, 2024. <https://doi.org/10.1017/S147924432400043X>
- Hess, Andreas, *The Political Theory of Judith N. Shklar: Exile from Exile*, Springer, 2014.
- Hiruta, Kei, "The Contested Legacy of Cold War Liberalism," *Global Intellectual History*, 2024. <https://doi.org/10.1080/23801883.2023.2295352>
- Koikkalainen, Petri, *The Life of Political Philosophy After its Death: History of an Argument Concerning the Possibility of a Theoretical Approach to Politics* [Unpublished academic dissertation], University of Lapland Press, Acta Universitatis Lapponiensis 81, 2005.
- Laslett, Peter, "Introduction", *Philosophy, Politics and Society, First Series*, edited by Peter Laslett, Basil Blackwell, 1956.
- Laslett, Peter & Fishkin, James, "Introduction", *Philosophy, Politics and Society, Fifth Series*, edited by Peter Laslett & James Fishkin, Basil Blackwell, 1979.
- Lukes, Steven, "Anthony Arblaster obituary," *the Guardian*, 3, Jun, 2022, <https://www.theguardian.com/politics/2022/jun/03/anthony-arblaster-obituary>
- Marriott, Shal & Moyn, Samuel "Liberalism against Itself. An Interview with Samuel Moyn,"

- Journal of the History of Ideas* BLOG, March 11, 2024.
<https://www.jhiblog.org/2024/03/11/liberalism-against-itself-an-interview-with-samuel-moyn/>
- Moyn, Samuel, *Liberalism against Itself: Cold War Intellectuals and the Making of Our Times*, Yale University Press
- Müller, Jan-Werner, "Fear and Freedom: On 'Cold War Liberalism'," *European Journal of Political Theory*, vol. 7, no. 1, pp. 45-64, 2008.
- Müller, Jan-Werner Müller, "What Cold War Liberalism Can Teach Us Today," *New York Review of Books*, November 26, 2018, <https://www.nybooks.com/online/2018/11/26/what-cold-war-liberalism-can-teach-us-today/>
- Rosenblum, Nancy, "Introduction", *Liberalism and the Moral Life*, edited by Nancy Rosenblum, Harvard University Press, 1988.
- Sabl, Andrew, "Judith Shklar, *Ordinary Vices*," *The Oxford Handbook of Classics in Contemporary Political Theory*, edited by Jacob T. Levy, Online publication, September 2019. <https://doi.org/10.1093/oxfordhb/9780198717133.013.52019>.
- Shklar, Judith, "Putting Cruelty First," *Daedalus*, vol. 11, no. 3, 1982.
- Shklar, Judith, *Ordinary Vices*, Harvard University Press, 1984.
- Shklar, Judith, *Montesquieu*, Oxford University Press, 1987a.
- Shklar, Judith, "Bookreview: *Montaigne in Motion*, by Jean Starobinski," *Political Theory*, vol. 15, no. 5, 653-57, 1987b.
- Shklar, Judith, "The Liberalism of Fear," in *Liberalism and the Moral Life*, edited by Nancy Rosenblum, Harvard University Press, 21-38, 1988. (大川正彦訳「恐怖のリベラリズム」『現代思想』29巻7号, 120-139頁, 青土社, 2001年6月。)
- Shklar, Judith, "A Life of Learning," *Liberalism Without Illusions: Essays on Liberal Theory and the Political Vision of Judith N. Shklar*, edited by Bernard Yack, University of Chicago, Press, 263-79. 1996. (First published in 1989.)
- Yack, Bernard, "Shklar's Montaigne-and Ours: A Genealogy of Liberal Morals," *Between Utopia and Realism: The Political Thought of Judith N. Shklar*, edited by Samantha Ashenden and Andreas Hess, University of Pennsylvania Press, 2020.
- 宇羽野明子『政治的寛容』有斐閣, 2014年。
- 大川正彦「恐怖のリベラリズム, 残酷さと恐怖の感受体装置としての: ジュディス・N・シュクラ『日常の悪徳』を読む」東京外国語大学海外事情研究所 *Quadrante*, no.24, 213-236頁, 2022年。
- ミューラー, ヤン＝ヴェルナー (古川高子訳)『恐怖と自由: ジュディス・シュクラのリベラリズム論と21世紀の民主制』みすず書房, 2024年。